ぷれみあむみにつ

premium minute

第11集

エロストラートの巻

☆ shiroa ☆

☆　１４　☆　エロストラート

　弁慶はミユウちゃんを床に降ろし、構えた。荷物を背負っていない弁慶は、リミット解除のモンスターマシンと同等だろう。その白兵戦での強さはプロの格闘家でなければ太刀打ちできないかも知れない。
　エロスは右手に銃をとった。そして静かに言った。
「フェアでなければいけない。俺の銃には今三発の弾丸が込められている。そこの若い男と女は計算外だったが、まぁ問題は無いだろう。館長からの指令だ。チョコレートパレスに闖入し、狼藉を働いた報い。死して償え。一発は威嚇として。一発はパンダの死へ。一発は大男の死へ」
　そこまで語った時、弁慶は動いた。巨漢からは想像もできない俊敏さで右へ駆け、目で追った矢先に左に動き、不規則な読めない動きでエロスとの間合いを縮める。

　ぱん。

　音と同時に弁慶が膝をついた。
「うぐ、無念。お主、想像以上の使い手だな」
　弁慶の右足の太もも辺りから、血が流れ出した。
　エロスはあくまで平然と、先ほどと変わらぬ静かな口調で言った。
「動くな。大男の為の弾丸は残り一発。もし下手な動きをすれば、もう殺さなければいけなくなる。言っておくぞ。今俺はお前を殺すことができた」
　背筋が凍りそうだ。シャツの下で嫌な汗が流れる。
「生きるには理由が必要なように、死には儀式が必要だ。俺には死後の世界があるかどうかは分からない。が、死ぬ前の人の魂は穏やかであるべきだ。覚悟を決めた、穏やかさ。それを得るためには儀式が必要だ。少なくとも今までの人生を述懐し、目の前のどういう男に自分の人生の結末を委ねるか。それを知り、覚悟を決めることで今までの自分の人生を肯定する。納得して死ぬことが、無難な死のかたちだ。今日の続きが当然あるかのように思っていたら、翌日死んでいた。これでは魂は悔恨で満たされ、おちおち成仏もできまい」
　エロスは壁から一脚のパイプ椅子を持ち出すと、それを広げ座った。ミユウちゃんは少しずつ後ずさりし、弁慶から離れる。パンダマンは弁慶に近づき、ハンカチを傷口に当てた。俺は、その場から動くことができなかった。
　場は完全にエロスに支配されていた。
「若い男と女、……どこかで見たやつだな。まぁいい。お前たちは命令に入っていない。殺す必要はないだろう」
その言葉で少しほっとした。ただでは済まないだろうが、死にはしない。
「が、勝手に闖入したことには変わりない。それなりの裁きは覚悟しておけ」
　覚悟は必要なようだ。最悪、俺は殺されてもいい。ミユウちゃんは無事に逃がしたい。
　そこで縛られている門下生の一人が声を発した。

「エロス、早くほどいてくれ」
　エロスはそいつを睨んだ。
「待て。片が付いたらな」
　門下生はそれ以上何も言えなかった。完全に怯えていた。仲間、なのに。なんだ、この男は。
「さて。五分やる。その間にパンダと大男は自分の人生を静かに振り返れ。自分が何のために生きてきたのか。その理由をはっきりと知るのだ。もう数分後、お前たちは死ぬ。生きてから死ぬまでの間、お前たちは何の役割を持って生れてきたのか。それをはっきりと自覚しろ」

　五分という長い沈黙が訪れた。
　エロスとは何者なのだろうか。
　どうやらただの殺し屋ではない。
　思想家なのだろうか。哲学者か。
　はじめワケの判らないことに聞えた。
　けど、あながちおかしなことでもない。
　例えば物語を読み始める。
　その話の意図は不明のまま読み進める。
　物語を読み終わる。
　全体から作者の意図が見えてくる。
　エロスが言いたいのはそういうことだろう。
　人生を生きている最中は、気付けない。
　けど、人生の終わりに振り返れば、
　自分の生きてきた理由、役割、使命。
　それが判るはず。そう言いたいのだ。
　パンダマンは俯いている。
　弁慶は、穏やかな顔で瞼を臥している。
　二人は何を考えているのだろう。
　自分の人生の意味を理解するのだろうか。
　たった五分で、判るものだろうか。

「時間だ」
　エロスが言った。
　場は水を打ったような静寂が漂っていた。弁慶の足元は血だまりができていた。もう、あれではまともに歩けないだろう。貫通して跳弾があったようには見えなかった。恐らく、弾丸は足に埋まったままだ。
「パンダ、お前は自分の生きてきた理由が判ったか？」
　パンダマンは横を向き、吐き捨てるように言った。
「知らん」

　エロスはにやりと笑った。
「なるほどな。あとで後悔しなければいいけどな。さて大男、お前は自分の生きてきた理由が判ったか？」
　弁慶は答える。
「其れがしの使命は、厭離穢土欣求浄土。ただ、それだけでござる」
　俺には弁慶が何を言っているのかわからなかった。エロスは頷いていた。
「穢れた地を離れ、清らかな地を求める。家康か。なるほど、尊いな」
　エロスは何度も頷き、ポケットからぼろぼろの本を取り出した。恐らく、何度も読み返しているのだろう。本の扉は丸く開くようにカタが付いており、本の中央近くは黒く汚れていた。
「俺について話そう。二十代半ばだった私は、すべてに失望していた。信じていた人に裏切られ、目標としていたことは、決して手の届かないところにあることを知った。テレビをつけると、ニュースでは政治に失望した。新しいルールを作ろうとする。そのルールにより損くじを引く人がでる。テレビや野党はその損くじを引く人を盾に、与党を攻める。与党は困り、話は難航する。……こんなんで、日本が本当に良くなるのだろうか？　新しいルールを敷き、豊かな未来を作ろうとすれば、その作り上げる過程で犠牲になる人は必ずいるだろう。そんなの、切り捨てればいい。事実、人間の歴史はそれを行ってきた。もし未来に生きるための人間が困窮するのなら、思い切って今犠牲になる人間を生贄に捧げないといけない。
　本当はそんなこと判っているはずだ。小泉は痛みを伴う政治と言った。当たり前だ。痛みのない誤魔化しの療法ではゆでガエルのように、気が付けば自分が生きられる限界の温度にゆで上げられ、ぽっくり死んでしまう。今を誤魔化し、全滅するか。一部の人間が犠牲になり、未来に命をつなげるか。二つの選択肢があれば、誰だって、幼稚園児だって迷わず後者をとるだろう。当たり前だ。滅びるより、未来につながる方が、結果たくさんの人間が幸福になるのだから。
　俺は完全に腐っていた。そしてそんな犠牲を恐れる政治家を消し、本物の政治家が日本に台頭するべきだと思った。それこそが、俺の生きる目的だと悟った。その為に、俺は命を捨てよう。そう考えたのだ。
　だが迷いがあった。どう考えても今の俺の考えはただの過激派か、異常者ではないか。迷っていた俺は本屋に行き、適当に本を選んだ。なぜその本を選んだのか、俺にはその理由はわからない。ただ、神が存在するならば、俺とその本を引き合わせてくれたとしか考えられない。文学も、哲学も、ましてや実存主義など俺にはちんぷんかんぷんなことだった。サルトルの小説『水いらず』というタイトルの本だ」
　そう言ってエロスは手にした本をぐっと握りしめた。恐らく、その本が『水いらず』なのだろう。
「この本の中に『エロストラート』という話が載っている。他の作品は、まったく覚えていない。面白かったかも知れないし、つまらなかったかもしれない。しかしこの『エロストラート』だけは、読んだ瞬間に電撃をくらったような衝撃を受けた。
　銃を手にした男は、世の中に嫌悪していた。少しでも問題を提議し、世を良くしようと無差別殺人を行おうとする。著名な作家百数人に手紙を一度に送り、予告通りに決行しようとする。銃

には六発の弾を込めていた。五人を殺害し、最後の一発は自殺の為にとっておく。しかし事はうまく運ばず、男は死を選ぶが土壇場で思いなおし、投降する。
　この話を読んだ俺は、ようやく迷いをふっ切ることができた。自分の考えは、やはり正しかったのだ。そして俺は死んでもいいと思っていたが、それでは駄目だ。生きねばならない。そして法では綺麗にできない汚い物を、俺が綺麗にしていく。これこそが俺の生きる意味だったのだ。
　興奮していた。俺は夜の町に踏みこんでいた。どこの店に入るでもなく、徘徊していたら、ガキに絡まれた。口論になり、暴力沙汰になると感じた俺は、店と店の間の細い路地に入った。人が一人やっと入れる場所なら、背後を気にしなくていい。一対三で戦うより、一対一を三回戦う方が勝ちも拾えるだろう。全く負ける気はしなかった。一人目のガキを叩きのめし、二人目のガキがナイフを抜いてかかって来た。バカなガキだった。ナイフは扱い方を知っていて、はじめて武器になる道具だ。りんごの皮しかむけないようなガキがもったところで、かえって素手よりも戦闘力が下がる。場所も考えろって話だ。細い路地では振り回すこともできない。ガキが突いてきたところ、手首をつかみ捻り上げ、ナイフの切っ先でガキの顔を深く抉ってやった。これで喧嘩は終わった。三人目は恐れて逃げ出した。ナイフにびびらない俺には、虚仮のおどししかできない自分らでは相手にならないと悟ったのだろう。ガキが去った後、しばらくひとり笑っていた。笑いが止まらなかった。俺はおかしくなったのか？　そう思ったが、笑えるだけ笑ってしまえと思った。これから俺は世の中を変えていく人間だ。常軌を逸してこそ正常だ。俺はその場に尻をつき、笑っていた。
　運命は連鎖する。神は必要な時、必要な出会いと、必要な物を全て与えてくれる。これは本当だ。
　こみ上げていた笑いがひと段落しそうな時、後ろに寄りかかるように、ふと俺は右手を地面についた。すると手にべったりと粘っこい液体がついた。路地裏の光が届かない場所で、手のひらは真っ黒にうつった。俺は携帯電話を開き、そのか細い光を頼りに周りを調べてみた。俺が触ったのは血だった。大男の血だ。男は俺のすぐ後ろで大の字に倒れていた。胸と腹と脳天に穴が開いていた。やくざの抗争か？　まったく恐怖はなかった。それより、期待で興奮が高まっていた。俺はもう少し周りを調べ、そしてついにみつけた。
　銃だ。オートマチック銃。弾が何発込められているか判らない。六発入っている予感があったが、まぁそんなことはどうでもいい。これは啓示だ。俺は神から裁けと啓示を受けたのだ」
　エロスは淡々と語った。もう何度も、何十回も語っているのだろう。話のテンポ、言い回し、シナリオ通り訓練されたかのような語りだった。
　エロス――この通り名はエロストラートから来ていたらしい。そんな小説は文学に疎い俺にはさっぱりだったが、どこかＨなやつだからそう呼ばれてるんじゃないかという、中学生のような発想をしていた俺が恥ずかしい。
「お前、めちゃくちゃなヤツだな。勝手な言い分で勝手に裁くとかなんとかいっちゃってるけど、そんなの法が認めるワケがないだろう！　お前はただの罪人なんだよっ！」
　パンダマンが呆れたように言った。エロスの眉がぴくりと動いた。
「法が認めないだと？　結構じゃないか。ところで、法とは日本国憲法のことか？」

「そうだ、当たり前だ。日本は法治国家だ」
　エロスは落ち着き払った声で言った。
「日本の憲法は、誰が作った法だ。人間じゃないのか。人間が勝手に自分たちの社会がうまくいくように作ったルール、ただそれだけだろう」
　まるで、それがどうしたとでも言わんばかりだ。
「その法を破っては、秩序が乱れるんだろうが。無法状態になれば、どれだけの人間が困るか想像したか」
　エロスは頷いた。
「なるほど、勘違いしているね。俺は決して法を無くせと言ってるんじゃない。日本国憲法はそのまま機能していないと困るのは俺も賛成だ。ただ、その法に従っていれば秩序は保たれるのだろうか。今日のニュースでまた殺人事件が報道されてないか？　予言していいが、来年も法を犯し犯罪者になる人間はごまんと出るだろう。俺の予想は外れると思うか？」
　外れ、ない。日々、ニュースで悲惨な事件が報道される。むしろそれが当たり前。もしかしたら、俺たちの感覚はマヒしているのかも知れない。
　さすがにパンダマンも押し黙った。
「そもそもパンダ、雲運運団は公正なはずの宝くじを操作し、当たりくじを捏造しようとしたな。これは違法ではないのか？」
　パンダマンは後ずさり、何も言えない。
「ルールはルール。必要だ。日本国憲法は、俺にとってはサッカーのルールと同じこと。サッカーはプロの試合でもペナルティが頻発するだろ。ルール破りは認められてるんだ。場合によっては作戦だってある。イエローカードまでの違反で、一点のゴールが守れるのであれば……選手は違反をとる。とかね。
俺が行っているのはそこだ。法では裁けないことを、俺が肩代わりする。一般的には罪人と言われるだろうが、俺自身は正義だと思っている。神に与えられた使命だと思っている。
　俺は殺し屋だ。だからと言って人を遊び半分で殺すことはしない。命に対する敬意を払って、殺す。だから、儀式は必要だ。
　命にとって、自分が何のために存在したのか。存在しどんな意味があったのか。それを自覚できることは幸福なことだ。そして最期の時、どのような人間に殺されるか。どのような最期を遂げるか。それを知らせることも大切だ。そうじゃないとフェアではないと考えている。
　そして覚悟を決めた相手に対し、魂の安らぎの祈りを込めた銃弾を、俺は放つ」

　ぱん。

　ずいぶんとあっさりとした射撃だった。
　そしてワンテンポ遅れて、どさりと倒れる音がした。
　俺は倒れた音がした方へ、顔を向けた。

（続く）

あとがき？　次回予告？　ひとりごと？

しろあです。

物語もいよいよ大詰めですね。
今回の章、次に繋がる章は、この物語を創作した中で、もっとも核となる部分、一番描きたかった部分です。

物語のはじめから読んでいただいた方には、驚きのある話しになったかもしれません。

まさかあんなバカな話が、こんなにシリアスな展開になろうとは！
まさかただのバカだと思っていた作者が、こんな知的な伏線を敷いていたとは！

まぁそんなことはどうでもいいんですが。
ようするに面白いか、どうか。これだけです。

気になるラストです。
どうやら銃で誰かが撃たれたようですが……果たして倒れたのは？！

次章は最終章「プレミアムミニッツ」。
そして巻を分けてエピローグへ。
もしかしたらエピローグは（上）、（下）に分かれるかもしれません。
……常軌を逸した長さですから。

もし途中から読んでちょっとでも気になった方は、１巻から読んでおいていただけるとちょうどいいペースでアップされる思います。

ではでは～。